

## ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル

短編集『合一』をめぐる不一致

長谷川 淳基

Robert Musil und Alfred Kerr  
Ihre Uneinigkeit um „die Vereinigungen“

Junki HASEGAWA

### I 始めに

たった一篇の批評文により小説家ムージルを華々しく世に送り出したアルフレート・ケルは、要するにムージルの庇護者であったわけだが、他方、ケルの書く文章のスタイル、ものの考え方その他さまざまについてムージルが影響を受けた点で、ケルはムージルの師と呼ぶにふさわしい存在であった。そうではあるものの、ムージルが処女作『生徒テルレスの惑乱』につづく第二作『合一』を発表するや、二人の間には一転してすきま風が吹き始めた。

ムージルが『合一』を書いた時期、ケルはムージルに何を見たのか、そしてムージルはケルにどう向き合ったのか。

ある場合に、人は目の前に現れた人物を肯定的に評価し、かけがえのない人物であると感じる。しかしそうした時に、必ずしも相手の何かを見抜き、何かを認識してそのように感じたり評価を下すとは限らない。そこには一方的な思い込み、理想像の投影、誤解もありうる。そしてそうであっても人の生はとどまることなく、期待を受けた人物はその期待通りの姿になるべく、前へ前へと進んで行くものなのかもしれない。かつての出会いの時期の一方的な思い込み、理想像の投影は神様が下した予言であったかのごとく、そしてその場合に、思った側も、思われた側もそれぞれに最終の目標を違えることがなく…。

以下、庇護者の氣に染まない作品を書いたこの時期のムージルについて考察し、この時期がムージル文学全体に果たした意味を考える。

### II 『テルレス』以後のムージル

#### その1 学究生活の断念

1906年12月21日、アルフレート・ケルは「ターク」紙に長文の批評を発表した。ムージルの初めての小説『生徒テルレスの惑乱』を激賞する内容のものであった。ムージルのそ

の後の人生は、この批評文から始まったと言うこともできる。何よりも、ムージル自身そうしたふうに考えている<sup>1)</sup>。

ベルリンの有力批評家の応援を得て作家の仲間入りをしたムージルであったが、このとき彼は自らの将来を決めかねていた。シュトゥットガルトでの生活を一年足らずで切り上げ、すなわちエンジニアとしての将来に見切りをつけ、1903年9月下旬にベルリンへ出てきたムージルの新たな目的は哲学、心理学そして数学、物理学を学ぶことであった。こうした分野の知識を身につけ、学問を追求するというにとどまらず、具体的な目論見、すなわち学位の獲得をも当初から視野に入れていた。そのことがあってムージルは翌1904年6月にかけて、ブリュンのギムナジウムで遅ればせながら大学入学資格を獲得するのである。

こうした努力は1908年3月に実を結び、ムージルは哲学博士号を授与される。が、このときムージルは自らの学問に情熱を失っていた。この年の末にムージルはオーストリア、グラーツ大学のアレクシス・マイノング教授から助手ポストの誘いを受けている。ムージルはマイノングに二通の手紙を書いた。

ブリュン、1908年12月30日

拝啓 教授閣下

教授におかれましてはグラーツの助手ポスト人事に関し、折りにふれ、教授おんみずから私について格別の関心とご好意を示された旨、私の従兄弟シューフ博士から伺いました。——今現在、私はミュンヘン工科大学の教授資格取得に関連しまして好都合な条件が重なり、それゆえに大いなる見通しのもと、先方と書状の交換の最中にございます。それゆえに閣下へのご回答につきましては、いま数日御猶予いただきたく、この旨伏してお願い申し上げます。——

事態の推移により、結果として閣下の御指揮下にてお仕え申すことが実現しました暁には、これを身に余る喜びといたしますこととお誓いし、私の目下の思惑をお伝えしつつ閣下には心よりの恭順の意を表し奉る次第にございます。

博士 ローベルト・ムージル<sup>2)</sup>

1909年1月18日

ベルリン、レーゲンスブルク通り15-50

拝啓 教授閣下

お返事がたいへんに遅れましたこと、まことに申し訳ございませんでした。私の決心がつきかねておりました故のことにございます。ミュンヘンの件は最終的に当初の約束とはまったく異なる結果に相成った次第にございます。しかしこうした結果にも関わらず、私にはグラーツへ赴く決心が依然つきかねております。仮に、教授のもとに馳せ赴くことが叶いますならば、それはわが身の光栄というに留まらず私の学問研鑽の面からも望むべくもない最大の利得と承知をしてございますこと、教授には是非にも私の真意のほどをお察しいただきたく申し述べる次第にございます。しかしながら文学に対する私の愛は学問へのそれに比して決して些少なものではございません。それゆえに、即座にも下せるはずの決断が私の人生上の難問と相成った次第にございます。

本日、この件にまつわるあれこれの事情を判断いたしますに、グラーツへの想いに

つきましてはこれに抗するのが本意との思いに立ち至った次第でございます。とは申せ、この判断が十分に分別のある、かつ最終のものであるとの確信からはいまだ程遠く、こうした瞬間の直後にも自らの判断を悔やむやもしれぬことをまこと恐れおる次第でございます。しかしながら、閣下のご厚情に対し引き続きなお優柔不断をもってお応えいたすことはもとより出来かねることであり、そうでありますなら、ここは率直な私の気持ちをこそお伝え申すことが、私の真意と心得た次第でございます。

この度は閣下に対します私の感謝の気持ちを然るべく形にしてお示し申し上げることが叶いませぬが、今後に及びましても、引き続き閣下のご厚誼に預かることができますことを切に祈りつつ、閣下の足下ににて心より恭順の意を表し奉る次第でございます。

博士 ローベルト・ムージル<sup>3)</sup>

実験心理学者アレクシウス・マイノングは、1894年グラーツ大学にオーストリアで初の実験心理学研究所を設立した。マイノング率いるこの研究所からはローベルト・ムージルと同年代の優れた研究者が数多く世に出、後にそれらの学者はグラーツ学派と総称されることになる。ウィーンのエルンスト・マッハ、あるいはベルリンのカール・シュトゥンプフとしてのぎを削っていたマイノングにとって、マッハの学説をとにかくも批判した論文を書き、かつ指導教授のシュトゥンプフとの仲がしっくりとはいかなかったムージルを自分のもとの迎えることはそれなりに深い読みがあったのかもしれない。

手紙の中でムージルが言及しているミュンヘン工科大学の教授資格の取得については、ここでムージル自身が触れている以上のことはわかっていない<sup>4)</sup>。ブリュン工科大学教授である父アルフレート・ムージルの人脈等からそうしたいきさつが生じたのか、またはシュトゥンプフの方の関係も想像はできる。カール・シュトゥンプフはバイエルン生まれであり、かつベルリンへはミュンヘン大学から赴任してきた。赴任後も引き続きミュンヘンに影響力などがあったのかもしれない。

二通の手紙の文面とこの時期のムージルを重ねるとき、どうしても見過ごしたままにできない言葉がこの手紙にはある。文学への「愛」という言い方である。マイノングからの要請で、ムージルの研究者としての道は大きく開かれていた。しかしムージルは自らこれをきっぱりと拒否している。文学への「愛」(リーベ)からそうすると述べている。

ムージルがこうした手紙のなかで、この文脈で使う言葉としてはいささか個人的な情緒が勝ちすぎている。この頃のムージルは彼の人生を通して決定的な意味を持つことになる愛の問題に直面していた。生涯の伴侶マルタがムージルの前に登場していた。

## その2 マルタとの出会い

ムージルは、ベルリンでさまざまな人物と出会う。そのうちでもアルフレート・ケルと、そしてマルタは別格の存在といえる。

ムージルの伝記に詳しいコリーノによると、ムージルがマルタと最初に出会ったのは1906年の夏、バルト海に面したメックレンブルクの海水浴場グラールのことであった<sup>5)</sup>。二人は出会ったものの、「一目惚れ」というようなことにはならなかった。

ムージルにとってマルタの存在は彼の作家としての人生に特別な意味を持つ。マルタとムージルの関係を抜きに、特にこの時期のムージルとこの時期の彼の作品とについて何か

を語ることはできないと思うがゆえに、以下ムージルの日記の記述、そしてコリーノ並びにディンクラーゲの研究<sup>6)</sup>をもとにマルタの身辺について述べる。

マルタは1874年1月21日、ユダヤ人銀行家ベノ・ハイマンとその妻フランツィスカ・フリーデリケの娘としてベルリンで生まれた。その8週間後に銀行の破産が原因で父ベノは自殺する。「いつも外出がちの」(TI, S. 922) 母親から十分な庇護を受けることのできなかったマルタ<sup>7)</sup>は、12才になると母の姉グートヒルデ・ヘンリエッテ・アレクサンダーの家に預けられ、以来この家で養育されることになる。マルタの伯母グートヒルデ・ヘンリエッテは妹フランツィスカ・フリーデリケより2才年上で、夫のアレクサンダーはやはり銀行家であった。

この家には4人の男の子がいた。エトムント、フリッツ、ハンス、カールのこれら4人の従兄弟のうち、家族の期待を最も集めたのはフリッツであった。彼は特に画才に恵まれていた。マルタはこのフリッツに特別な共感を覚えた。マルタについてムージルは以下のように記している。

マルタは5、6才でシラーを全部読んだ。そして7才で毎日2冊ずつ小説を読んでいった。彼女はライプチヒ通りの図書館からそうした本を祖母のために借りてきたのであったが、返却する前に急いで彼女自身も読みふけた。彼女の母は外出がちで子供には無頓着だった。「でも、これは私にも好都合だったわ。だって、したいことが何だってできたから。」7才で彼女は自分ひとりで決めて、服を買っていた。

したいことがそのとおりにできる、だめと言われたときはとりあえず言うことを聞く、こうした子供の頃の性格は一生の性格となる。本能的なところが優勢で、本心を表に出さない。

もう一つの性格、我々二人に並外れて優勢な点：一人の女性、一人の男性を自分のものにしたいと思うところ。(TI, S. 922)

フリッツは1890年、20才の時にフーゴ・フォン・ハバーマンに師事すべくミュンヘンに赴き、新進の画家としての地歩を固める。

こうした一方マルタは19才になった1893年、マルティン・コーンと婚約することになった<sup>8)</sup>。1872年生まれのマールティンはこの時21才、父エミール・コーンは騎士領領主で工場主であり、彼はその御曹司であった。この婚約はしかしながら、翌年には解消されてしまう。マルタが最終的に結婚の相手に選んだのは従兄弟のフリッツであった。

二人は1895年1月にベルリンで結婚式を挙げた。フリッツ25才、マルタは21才の誕生日を2週間後に控えていた。しかしこの幸せは長くは続かなかった。この年の11月、フリッツはチフスによりフィレンツェのホテルで亡くなる。フリッツの死後マルタはとりあえず結婚以前まで住んでいた家に、つまりは亡き夫の実家に戻って暮らすことになった。

コリーノによると、再び戻ってきたこの家でマルタは二人の従兄弟の間にいさかいを生じさせてしまったようだ。長兄のエトムントはもともとマルタに特別な感情を抱いていたらしく、一方マルタの方はフリッツの弟ハンスに対し、亡きフリッツの面影を見いだしていた。こうしたこともあってマルタは1906年末に一人ミュンヘンに移り住む。直接の理由はマルタの絵の勉強のためであった。師は夫を指導したハバーマンであった。

このミュンヘンにマルタを追ってやってきた男がいる。パウル・カッシーラーである。出版業を営み、画商としてセザンヌ、ヴァン・ゴッホの価値をドイツ内外に知らしめたカッシーラーには、しかしながら妻子があった。妻ルーツィエとマルタ、そしてカッシーラーはそれぞれにかつての親しい友人であり、カッシーラーはある時期ルーツィエとマルタのどちらを選ぶべきか迷ったことがあった。そしてマルタの気持ちがフリッツに向いていることを知って、結果ルーツィエと結ばれた。

カッシーラーとの関係を貫き通すことは出来なかったであろう、マルタは1897年のカッシーラーとの「短い関係」<sup>9)</sup>を終わらせ、翌1898年9月25日、石灰坑とセメント炉を所有するローマの商人エンリーコ・マルコヴァルディと再婚する。マルタとマルコヴァルディは同い年であった。

エンリーコ・マルコヴァルディとマルタが知り合ったきっかけは、マルタがアレクサンダー家、つまりフリッツの実家の、親類とローマを訪れた折りに利用したホテル「ラ・ベネーテ」での出会いであった<sup>10)</sup>。マルタは結婚に先立ち、ドレスデンのカトリック教会で洗礼を受けた。マルコヴァルディとの間には二人の子供が、すなわち結婚した年1898年には長男ガエターノ、1903年には長女アニーナが生まれた。マルタとマルコヴァルディの間には、どうやら精神的つながりといったものが希薄であったのかもしれない。アニーナが生まれた後、マルタはその年のうちにベルリンへ帰ってくる。ローヴィス・コリントが開いた「婦人のための絵画学校」に入学し絵の勉強を続けるマルタに、いまだ独身のままの従兄弟エトムント、かつての婚約者マルティン・コーンとの付き合いも復活し、その他親しい男性の友人も現れたようだ<sup>11)</sup>。

こうした時期に続く1906年夏、バルト海の避暑地でマルタとムージルは初めて出会う。マルタ32才、ムージルは26才であった。ムージルの『テルレス』は未だ出版されてはいなかった。そしてマルタはそのときマルコヴァルディ夫人であり、ベルリンに男性の友人たちもいた。先に述べたように二人の間は「一目惚れ」というようなことにはならなかった。これも詳しくは分っていないが、ムージルにも女友達がいた。ヘルマ・ディーツである。小説『トンカ』のモデルとされるこの女性については、いずれ稿を改めて述べたいと思う。

以上、ムージルと出会うまでのマルタについて述べてきた。『特性のない男』になぞらえて言うならば「一種の序文」として。

### III 小説集『合一』のモチーフ

#### その1 『魔法の家』と『ヴェロニカ』

1906年末に『テルレス』が世に出た後、ムージルは次に学位論文に集中する。指導教授シュトゥンプフがこの小説のことを快く思っていなかったことは直接の関係はなかりうが、苦しんだあげく1907年6月に提出した論文はシュトゥンプフに受取りを拒否され、書き直しを求められる。再提出された論文は1908年2月7日にシュトゥンプフのもとをパスし、ムージルは2月27日の口述試験に臨む。「クム・ラウデ」(良)、第3番目の評価によりムージルは3月14日付けで哲学博士号を授与される。

この時期の前後にムージルはフランツ・ブライから、ブライ自身とカール・シュテルンハイムの主宰する雑誌に寄稿するよう求められる。

エッセイスト、批評家、雑誌の編集者として知られるフランツ・ブライもムージルの生涯に特別の役割を果たした人物である。ブライとムージルとの間で交わされた手紙のうち現存するもっとも早期のものが、この時期の手紙である。

1908年4月12日

ブリュン

拝啓

失念することの無いようにとのご教示を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。まことに残念なことです——試験終了の後、息つく暇もなく——長いこと先延ばしにしておりました兵器訓練に就かねばならないのです。解放されるのは5月半ばになると思います。これまでの経験から、この期間中の仕事は難しいと思っています。

しかし、書き始めたものがあります。これがまとまればと願っております。わが身の不運について神に祈りたい気持ちです。

私のこうした運命について悪くお取りいただくことのあるまいやう、どうぞお願い申し上げます。

敬具

ローベルト・ムージル

目下：ブリュン アウグスティン小路10

ベルリン住所：ヴィルマースドルフ レーゲンスブルク通り15

こうした経緯を経て、隔月刊の文芸雑誌「ヒュペーリオン」1908年第3巻6号にムージルの短編小説『魔法の家』を発表する。冒頭部分を読んでみよう。

「あの頃だったら、いつ彼女に毒を盛られてもおかしくなかったな。」のちになって、中尉デメテル・ナジは魔法の家での色恋沙汰について語るたびに、必ずこう言った。くだんのことがあったのは冬季の部隊集結訓練中、伯爵家が市内に構える古い邸宅に彼が何週間か宿営した折のことであった。そもそもの始まりであるが、短期間の配置転換を翌日に控えたある日のこと——男の話している内容が聞き取れず、頭を左右にかしげたりしてもいたが——彼は、ある会話の結末に耳をそば立てることになった。その会話は二人の人物のはっきりとそれと分かる高ぶった声で、隣室から彼のところへもたらされたものであった。最初に「いいえ」があった。非常に小さな声で、しかしそれ以前のものからは不思議に切り離されて、屋敷全体に高まり、そして男はまた何か言った。これははっきりと分らなかったが、それを境に彼は余すところなくはっきりとすべての言葉を聞き取ることができたのだった。(P. 141)

以上のような書き出しで始まるこの小説の登場人物は三人である。ある夜のこと、ふとした偶然からデメテルは隣室から漏れてくる一組の男女の会話に聞き入ることになる。自分の愛を受け入れるようにと説得する男に対し、この屋敷で伯母と二人して暮らしているヴィクトリアの声が拒否を繰り返す。ヴィクトリアに拒絶された彼は、自らの命を絶つことを告げ屋敷を去る。数日が経過して、郵便配達人が男からの手紙を運んでくる。地中海の町へ行った彼は死んではいなかった。その日ヴィクトリアは、折しもこの日演習先から

戻ってきたデメテルと関係を持つ。次の日の朝、デメテルは改めてヴィクトリアの部屋を訪れていた。そこへデメテルを探す同僚の親しげな声が通りから聞こえてくる。「デメテルよー、大将やーい、デメテル パチィ、どこだー？」その声にデメテルは腹立たしげにつぶやく。「あの阿呆。もうすぐ行くと。お嬢さん、わしら鍵ば掛けんね。そうせんと——あの無作法ものが、私を探しにやってくるといけませんからね。」

呼びかけのハンガリー語とそのお国訛りにつられて、デメテルも反射的にうっかりと日ごろの口調が出てしまう。文字通りにお里が知れて、慌てて自分のハンガリー訛りのドイツ語に、端正なドイツ語で言葉を継ぐデメテルのきまり悪そうな顔が読者の目に浮かぶこのシーンで小説は終わる。ストーリーを言うならば作品の全体はこれだけである。その他内容ということでは、この屋敷の家政は一人いる執事が取りしきっていること、屋敷の主であるヴィクトリアの伯母はできることなら高級将校の受け入れを望むが、この町の市長じきじきの執り成しがあって、デメテルを不承々々投宿させることなどが作品冒頭で語られる。その他、デメテルの氏名やらそのドイツ語、伯爵家が町に所有する居宅という設定などからデメテルはオーストリア＝ハンガリー帝国の軍人であり、ハンガリー人であることも知れる。屋敷は地方貴族が町に所有する邸宅である。しかしこうしたことはあくまでも副次的に述べられているか、あるいは作品描写の行間から間接的に推測できるととどまる。

ところでハンガリー人将校デメテルであるが、この名前についてコリーノは別の研究をも参照して解説している。すなわちラテン語の名前デメートリウスから派生したデメテルはハンガリーではごくありふれた名前であること、さらにはギリシャ神話の豊穡の女神デメテルを意識してムージルはこの名前を作品に採ったと考えている<sup>12)</sup>。

作品の内容について、もう少し詳しくみてみよう。先に述べたように『魔法の家』は文芸雑誌に発表されたものであり、その限りでは独立した読み物であることに間違いはない。しかし一読して明らかなように、この小説作品は完全に仕上げられてはいない。例えば、書き出しの「毒を盛られる」かもしれない状況に立ち至った理由、そうした経緯は書かれていない。二年半後に書き上がる短編小説『静かなヴェロニカの誘惑』がこの『魔法の家』の改作であることはこれも明々白々の事実であるから、『魔法の家』を「ヒューペーリオン」に発表した時点で、ムージルはこれを後に改めて完全な小説に仕上げるつもりでいたと思われる。

『魔法の家』と、そしてこれを発表した直後から「二年半ほとんど昼夜をおかず」懸命な取り組みにより改作した作品『静かなヴェロニカの誘惑』は、展開の異なる部分も少なくないが貫くテーマは変わることなく、男女の関係、その結びつきのありようが描かれている。変更ということでは、何よりも主人公の女性の名前がヴィクトリアからヴェロニカに変わっている点が最初に目につく。

ヴィクトリアの愛を得られず、そのために死を決意した男が屋敷を去っていったあと、ヴィクトリアにさまざまな想念が去来する。その中で彼女はこの男に對しかつて感じたことのない魂の親しさ、近さを自覚する。しかしそれは、男の死を前提とした彼女の感情であり、男の死を望む彼女の気持ちと矛盾するものではないことも明らかになる。ムージルはこうしたヴィクトリアと男との関係を見つめながら、「魂の孤独」に言及する。『魔法の家』ではこう語られる。

[...] というのも生きている人間が持つ魂とは、すなわちこれを受することを許さないもののことであり、あらゆる愛において残余として留保しておくもの、あらゆる愛においてただ自身のみを見つめるもののことである。自己を投げ出してしまふことなどありえない。(P. 148)

同じ認識が『ヴェロニカ』でも繰り返されている。

[...] しかしながら生きている人間が持つ魂とは、互いの相手がどんなに望もうとも、これを受することを許さないもののことであり、あらゆる愛において残余として留保しておくもの、あらゆる愛においてただ自身のみを見つめるもののことである。ヴェロニカは感じていた、それはあらゆる愛において自己を投げ出してしまふことのないものだ と [...] (P. 215)

人を恋しく思う気持ち、他者に対し絶対的に帰依する心は、身体的所有者としての当の相手と直接の対象とするものではなく、ただ自らの内でのみ認識として結晶化し存在しうると述べられている。彼女達は、夜、衣服を脱ぎ去ろうという気持ちになる。

ただ、自分自身のために。ただ、自身の近くにある自身とだけ暗い部屋にいるのだという感情を持ちたいがために。衣服が衣擦れの音をたてて床へ沈んだとき、彼女の胸は高鳴った [...] (P. 149, P. 218)

そして手紙が届く。魔法の家のヴィクトリアへの手紙にはこうあった。

あなたは何なのでしょう？ 僕は自殺をしませんでした。あなたはおそらく眠っている病人のように美しいことでしょう。しかし僕はといえば、通りへ出ることのできた男というだけです。僕は外に出てきました、そして戻るすべがありません。バターをつけたパンを食べ、暗褐色の船が浜に係留されています、僕を乗せていくはずでした。辺りの、騒がしくそして活発なすべてのものが僕をつかんで放してくれない。僕はまるで一本の杭のように捕縛され、周囲を固められ、根が張ってしまい、他のものに変われません…。(P. 151)

ヴェロニカにも手紙が届く。

君は何なのだろう？ 僕は自殺しなかった。僕はといえば、通りへ出ることのできた男、といったところ。僕は外に出たけど、帰れない。パンを食べている、暗褐色の船が浜に係留されている、僕を乗せていくはずだった。これまでよりも静かなもの、より不明瞭なもの、暖かく一杯に満ちたもの、性急につなぎ止められないもの、辺りの、騒がしくそして活発なすべてのものが僕をつかんで放さない。このことについてはいつか二人で話しをしよう。外に出てくるとすべてがただ単純で、つながりがなく、瓦れきの山のように次から次へと打ち捨てられている。ところが僕はこうしたものに、



まるで一本の杭のように捕縛され、周囲を固められ、根が張ってしまい…。(P. 220)

長い手紙の文面のうち、先のヴィクトリアには「あなたは何なのでしょう？ 僕は通りへ出ていくことができた」いう文だけが、そしてヴェロニカにはただ「僕は通りへ出ていくことができた」いう文だけが目に入った。ヴィクトリアにもヴェロニカにも等しくかつての感情が呼び覚まされる。

[...] 彼が自殺を遂げなかったことは、彼がまだ生きているという事実と同じではなかった。彼女の存在のうちで沈黙と、またしても沈下が始まったのだ。なにかが彼女のうちに黙り込み、しきりにつぶやく無数の混乱の中へ、そこから抜け出してきたと思う間もないうちに、またしても沈んでいくのであった。(P. 152, P. 221)

魔法の家のヴィクトリアは男からの手紙を受け取った日、デメテルの部屋を訪れる。いったんは彼を避け部屋を出たものの、すぐに「階段に腰をおろす。デメテルは彼女の横にしゃがみ込み、そしてことが行われた。」(P. 154) ヴィクトリアはデメテルにこうして「自己を投げ出す」。

静かなヴェロニカは「[...] ふいに自分が今デメテル、あのワルと、二人だけでこの家にいることを思った。彼女は身をすくめた。その後二人は以前よりも頻繁に階段ですれ違うようになった。すれ違うとき挨拶ぐらいは交わしたが、どうでもいいような言葉しか口にしなかった。[...] しばらくして二人はそれぞれ先へ歩きだした。依然話しはしなかった。」(P. 223) デメテルとの関係の展開は、魂には触れぬゆえパリーションが可能であった。

『魔法の家』を書いた後に二年半を費やしてムージルは二つの作品を書いた。短編小説集『合一』というタイトルのもとには『静かなヴェロニカの誘惑』と共にもう一つの作品『愛の完成』が収められている。

ここでこの二作品成立の最終局面を、ムージルの日記から簡単に確認しておきたい。

1910年8月12日 午後、僕のアパートで『静かなヴェロニカの誘惑』のすでに書き終えた部分をマルタに読んで聞かせた。うまく書けている。これから手を加えるべき箇所も厄介ではないように思われる。[...] 夜、マルタのアパートで『愛の完成』を朗読し、ひどく落胆した。二、三日前にはすごく良いできだと思ったのに。始めの数ページは今回とても気に入った。この箇所はまったく静かで素朴だ。(マルタは「透徹している」と言った。その通り、この言葉はここにぴったりだ) 第二のくだりは気になる部分もなく読んだが、そのあとのところはまたまたひどい出来だと感じた。[...] (TI. S. 213)

1910年8月13日 眠る前に(二つの短編の)仕事のやり方について二、三思いついた。僕にとって大切なのは、思考に付随する情熱のエネルギーである。何か変わった思考を導き出せないと、すぐに仕事が退屈になる。ほとんど一段落ごとにこうなのだ。結局のところ学問ではなくもっぱら一種の個人的な真理を追求しているこの思考が、なぜもっと迅速に進まないのか。芸術における思考の部分に、どこか分散する要因が潜んでいることに気づいた。[...] (TI. S. 214)

1910年8月14日（または12日から15日の間）<sup>13)</sup> ああ、またすぐにエネルギーが恐ろしいまでに枯渇、仕事への無気力 […] (TI. S. 215)

1910年8月19日 この三日間ひどい鬱状態。眠たい、時々めまい。何よりも仕事に自信が持てない。『ヴェロニカ』を放り出して、クラウディーネの方が何とかならないか考えよう。 […] (TI. S. 220)

1910年8月29日 つい先日の20日に語りの形式を採ることに決めた。短編の始めの部分を書き換えて清書。それについて一週間苦しんだ、そしてゼロ。依然としてゼロ。もう少しでまともに成るかもしれないが、やはりゼロ。ひどい鬱。上向く前は往々にしてまさしくこのようなものだという声もある。しかしこの二つの短編には時間がかかりすぎた。時間も気力もない。

この期間、僕とマルタは一度…と書く気も起きない。本当にひどい鬱。夜中零時半。今しがたマルタのところから戻った。前半部について彼女と徹底的に話し合った。今現在ここまでは進んだ。マルタは、明日11時に僕のところへ来ると約束してくれた。 […] (TI. S. 225)

1910年11月18日午後3時5分 クラウディーネ終える。(TI. S. 230)

1910年12月31日 昨晚、清書に向けてヴェロニカを最終推敲。(TI. S. 231)

マルタに素材を採り、マルタとの関係が深まる中、作品の完成を控えてマルタにすぎるムージルの苦悩ぶりは、あるいはマゾヒスティックなところもあったのではと思えるほどである。

## その2 『愛の完成』

同じ時期に、同じ特別の感情と気分の中で交互に執筆された『愛の完成』と『ヴェロニカ』は共通のモチーフを扱い、共に魂の孤独を書いたが、魂の結びつきのありよう、その可能性を追求した点では『愛の完成』のほう執拗で、何かがえぐり出されたかのように酷い。他者の魂も、別の他人が、即ちこちら側が、愛せない何かを留保している。そうした他者存在とおのれ自身とはいかに触れ合うことができ、結ばれうるのか。魂の孤独について考えを巡らせつつ、同時に「究極の結婚」(P. 165)を考えるムージルはこの時期、自らの存在にかかわる難問を解決すべく小説の執筆に勤しんだ。

クラウディーネは紅茶を用意しながら、寄宿舎に入っている娘のリリーに夫婦二人して会いに行きたい旨を夫に訴えている。自由な時間の取れない夫はそれができないことを告げている。クラウディーネは一人、娘に会うために旅行に出る。

汽車がその町に着く頃大雪になった。クラウディーネはこの町に、ある参事官と「雪に振り込められる」。この参事官に引かれるものを感じながら、クラウディーネに自らのさまざまな過去が思い出される。

娘のリリーはクラウディーネが以前の結婚のときに産んだ子供であった。娘の実の父親はクラウディーネが歯の治療に通った先の歯医者であった。クラウディーネは彼と一度だけ過ちを犯した。

「彼女の回りにめぐらした網を慎重にしばっていく」(P. 192) 参事官が「彼女にとってもう初対面の域にはなくて、内へ入ってくるばかり」のときに、クラウディーネが「ただ

夫とだけ分かち合っている何か」(P. 181)、夫と自分との「内なる合一」(Ebd.)を感じる。クラウディーネにとって、この状況と感覚は同時に生じ、一つに重なり合って存在し実現する。

魂と魂はついに一つにはなれず、それでも合一は可能であり、存在する。『愛の完成』は以下のように結ばれている。参事官を自分の部屋から追いやったあと、

[...] 彼女は自分の肉体があらゆる嫌悪にも関わらず快楽に満たされてくるのを、身震いとともに感じた。しかし同時に、いつか春の日に感じたことを思い出すような心地がした。こうしてまるですべての人間たちのためにありながら、それでもたった一人のためにあるような、そのようなこともできるのだ、と。そして遙か遠くに、子供たちが神のことを思って、神様は大きいんだと言うように、彼女は自分の愛の姿を思い浮かべた。(P. 193f.)

知り合って間もない一組の男女が一つ場所で、一つの時間を過ごす。そしてその女性の心は同時に他の男への、ここでは夫への限らない愛を自覚する。

ムージルの作品には少年が少女に憧れるとか、淡い初恋を扱ったものの類いは皆無である。『生徒テルレスの惑乱』に続く作品がこの『合一』である。少年のとまどいの世界の、すぐ次の場面は男女の性愛の世界である。その性愛の世界での、真に解き難い問題に取りかかり、そして答を見つけようとするここでのムージルには執念といった言葉とは違うものの、ムージルがこの世界へ踏み込んでそこを突破し、答を得ないことには必ずや窒息して息が絶えてしまうという切迫感がここには漂っている。

ムージルはマルタとの関係をこの先将来に向けて、どのように造っていくことができるのか、このことを時にマルタとも相談し、その答を問題と共に丁寧に清書し、これを作品としたとも考えられる。問が「二つの孤独な魂に合一の可能性のありや、なしや」という解き難い難問でありながら、必ずや答えを必要とする状況にあつて、ムージルは「昼夜を置かず」小説を執筆し続けた。

マルタとムージルであるが、二人は1911年4月ウィーンのプロテスタント教会で結婚式を挙げた。二人はこのときに新教に改宗した。マルタの離婚には、当然のことながら大変な苦労が伴った。夫のマルコヴァルディとは、先ずカトリックでいうところの「食事とベッドとを別々にする」手続きが最初にあつた。次に正式の離婚をするための手段として、マルタはハンガリー国籍を取得した。こうして1909年以降、マルタとムージルが正式に結ばれるまでの間、二人はブダペストとローマとを幾度も訪問しなければならなかった。

#### IV 『合一』をめぐるムージルとケル

ムージルは『合一』に収められた二作品、すなわち『ヴェロニカ』と『クラウディーネ』を書きながら、かつてのケルの批評、ほとんど一字一句をそらんじることでもできたかもしれない例のケルの批評を幾度も日記に引用している。『魔法の家』になぜケルは沈黙したのか——ムージルにとって、この時期、片時も頭から離れない疑問であつたに違いない。

1910年9月5日 テルレスについてのケルの批評を再び読み、衝撃を受けた。[…]  
(TI. 226)

ここでは、ケルの忠実な生徒であろうとする気持ちが記されている一方で、わずか二カ月後の日記では

1910年11月14日あるいは15日<sup>14)</sup> 私は言いたい：自分達の精神の産物について軽蔑するように話す文士たち。ケル：文学は私の人生ではほんの片隅を埋めるものでしかない。反論：文学とは大胆さと論理とが結合した生にほかならない。さまざまな可能性の産物、あるいはそこから生じた分析等々。文学とは、肉がそげ骨だけになり果てるまで知的情緒的目標にたち向かうものなのである。プロパガンダは別物である。(TI. 230)

この書き込みの数日後に『クラウドイーネ』を、さらに一カ月半を経たこの年の最後の日  
に『ヴェロニカ』をムージルは書き上げる。緊張と疲れがひと段落したであろうそのち  
ょうど一カ月後、ムージルはやはり日記の書き込みに長い時間を費やしている。

1911年1月30日 […] ケルに対し、簡単な決算書を付した手紙を考えた。ケルと  
「パーン」の社会主義的な方向性はおそらく最も強烈な体験と言えよう。ケルの若き  
ドイツ派への傾斜振りはますます顕著になる。文学に関することで彼が当初より抱  
いていた軽蔑の念への補足とハイネへの傾倒の補足の点で。ケルは私にとって運命  
をはらんだ人物である。唯一その人物の前だと、私自身の正当性について疑念が生  
じてしまう私の対蹠者。彼の政治的な煽動に影響を受けていることに、時折はっと  
気付くことがある。あたかも本を開いている好事家がふと我に返り、自らの想念に  
気付くことがあるように——これも、このこともこの俺が是非とも言うておこうと  
思っていたことなのだ…、こうして、これらのことを誰か他人に言われてしまった  
後で、この俺が同じことを感じることに、これも運命だとは俺にも分かっている。そ  
れにこうしたことを過去に何度も考えたのに、その都度すっかり忘れてしまったん  
だからな、と。しかしながら、私は先を歩く彼との距離を縮めるべく、決意を固め  
た。この結果が二つの評論である。「パーン」への評論、力になってやろう、役に立  
ちたいとの願い。もっともこれは私一人の力でなったものではない。他の人たちの  
導きがあったればこそなのだ。ブライのために書いた評論は、私から離れようとす  
るものを私のためにしかと捕まえようよとの希望、私の中のケルに対峙する私自  
身の立場を確保しようとの希望から生じた<sup>15)</sup>。

かつてケルに寄せた絶対的な信頼は消えている。

『魔法の家』についても、そしてついには『合一』についてもケルは完全に沈黙した。彼  
はなぜ沈黙したのか？

ケルは社会的正義に敏感であった。この場合に、ケルは一人になっても悪に徹底抗戦す  
るといったタイプの人間ではなく、大衆の側に立って不正なり、権力なりに抵抗の姿勢を

示した。そして、良き趣味、洗練された文化理解が彼の本分であった。生徒テルレスはやはり良き趣味、洗練された文化理解の能力に富み、悪しき権力への戦いを挑んだ。その場合に、しかしながらテルレスは孤独の戦いを強いられた。ケルは応援した<sup>16)</sup>。

『合一』でのテーマは性愛の問題であり、これが魂の触れ合いと両極をなすものとして扱われている。それが作品中、獣姦の連想<sup>17)</sup>に行き着くものであるとき、これはケルの社会的正義にはそぐわなかった。ケルの戦いは戦う度ごとに援軍が増えるという性質のものであった。ムージルにとっての戦いは多数の、あるいは今の場合には複数の、つまりは二人の、味方を前提とした性質ものではなかった。孤独の魂のありようを捕らえるべく片時も考えを止めないムージルはそれでも、それだからこそ自分の側に立つ人間を必死に求めていた。そうであったからムージルはケルを頼みとした。今、ムージルにはマルタがいた。両者を天秤に掛ける、というものではなかった。目下の問題はマルタとの関係からムージルに浮上したものである。しかしこれが具体的に作品になってみると、ケルの意に添うか、あるいはマルタの言葉に耳を貸すか。そうした状況も生まれてきた。先の1910年9月5日の日記の続きに以下の書き込みがある。

クラウディーネで言うてはいけないうこと：どこかで時計が時間について独り言を始め、足音が歩み [...]。——これは叙情詩だ。こうでなければならぬ：時計が打った。クラウディーネは感じた、どこかで始まる前触れでもあるかのごとく...、足音が歩み [...]。——前者では、比喩の選択を通じて作者自身が語っている：なんと美しい、作者は強調する、これは美しいはずだ云々。原則：作者は登場人物の身につける官庁用衣服をまとめて自己の存在を示すこと。常に登場人物に責任を押しつけること。このことは賢明というにとどまらず、奇妙なことにここから叙事詩が生まれもする。

ケルはかつて、ムージルには叙情詩のひ弱さがないと、誉めたたえた。しかしこの日記の書き込みとは異なり、『愛の完成』では「言うてはいけないう」表現が、結果として一部残された<sup>18)</sup>。

大衆の圧倒的な支持を集めるケルを目の当たりにしながら、ムージルの脳裏からケルが消えることはなかった。この点はまちがいない。『クラウディーネ』全体は、やはり引用した日記の「原則」が支配し、作者は登場人物の身につける官庁用衣服をまとめて自己の存在を示しているのである。しかしケルを遠く、そして異質に感じるようにもなった。一方のケルは沈黙した。不満を感じてひとたびペンを取れば、相手を刺し貫かずにはいない自分の文章スタイルを、ケルは十分に自覚していたのかもしれない。

ケルは今の時期、ムージルについて沈黙した。

## 注

ムージルのテキストは以下のものを使用した。

Musil, Robert: *Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik*.

Reinbek bei Hamburg 1978. (本文中ならびに以下の注で P. と略記し、その後ページ数を記す)

Musil, Robert: *Tagebücher*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg 1983. (本文中ならびに以下の注で

TI, TII と略記し、その後にページ数を記す)

Musil, Robert: *Briefe*. Hrsg. v. A. Frisé, Reinbek bei Hamburg 1981. (本文中ならびに以下の注で BI, BII と略記し、その後にページ数を記す)

- 1) 例えば、晩年の回想で「私の作家人生のうちで、二つの最もすばらしい瞬間」の一つにケルとの出会いをあげている。Vgl. TI, S. 912f.
- 2) BI, S. 61f. この手紙に名前を出ているシューフなる人物はマイノングのもとで4学期に渡り心理学研究会に参加し、1891年に学位を得た。ムージルとは親戚関係になく、家族同士つき合いのあった親しい知人の一人であったらしい。Vgl. TII, S. 33.
- 3) BI, S. 63f.
- 4) Vgl. TII, S. 33.
- 5) Vgl. Corino, Karl: *Robert Musils „Vereinigungen“*. Studien zu einer historischen-kritischen Ausgabe. München-Salzburg 1974, S. 44. これに関してコリーノはオットー・ローゼンタール (マルタの娘アンニーナの夫) から得た情報に加え、ムージルの数種の遺稿の書き込みを根拠にしている。
- 6) コリーノの上掲書のほか同じく Corino, Karl: *Robert Musil. Leben und Werk in Bildern und Texten*. Reinbek bei Hamburg 1988, 127f. 並びに Dinklage, Karl: *Musils Herkunft und Lebensgeschichte*. In: Dinklage, Karl: *Robert Musil. Leben, Werk, Wirkung*. Reinbek bei Hamburg 1960, S. 187-264.
- 7) Ebd. S. 220.
- 8) Corino: *Robert Musil*. S. 132.
- 9) Ebd. S. 133.
- 10) Corino: *Robert Musils „Vereinigungen“*. S. 42.
- 11) Ebd. S. 43.
- 12) Ebd. S. 148, Fußnote 1). ハンガリー人、魔法の世界、そして豊穡の神をコリーノの解説の通りに、あるいは作品に即して好色漢とするならば、オーストリア人にとっての典型的人物はいはライムントの『百万長者になった農夫』Raimund, Ferdinand: *Das Mädchen aus der Feenwelt oder Der Bauer als Millionär*. のプストーリウスであろう。この連想から地方語なまりのデメテルのドイツ語を、ここでは試みに九州弁ふうに訳した。
- 13) この日付は、ムージルがこの二年後に書き加えたものである。Vgl. TII. S. 131, Anm. 1a u. 2.
- 14) 注13) に同じ。なお、マルタにより1910年と書き加えられている。Vgl. TII. S. 140, Anm. 81.
- 15) ここで言及されている評論について、フリゼーは、ムージルのエッセイ *Über Robert Musils Bücher*. (P. 775-80) を示唆している。Vgl. TII S. 143, Anm. 126.
- 16) ケルはしかし、テルレスがバジーニ虐待を傍観したとして、テルレスを批判的に見ている。Vgl. Corino, Karl: *Robert Musil und Alfred Kerr. Der Dichter und sein Kritiker*. In: *Robert Musil. Studien zu seinem Werk*. Im Auftrag der Vereinigung Robert-Musil-Archiv, Klagenfurt, hrsg. von Karl Dinklage, zusammen mit Elisabeth Albertsen und Karl Corino, Reinbek bei Hamburg 1970, 127f.
- 17) 「一瞬、彼女の内でおののくものがあり、彼女を戒めた。獣姦という言葉が浮かんだ。私は獣と淫らごとをおかすことになるのだろうか…。その奥にはしかし彼女の愛の試みが潜んでいた。」(『愛の完成』) Vgl. P. 180.
- 18) Vgl. P. 172.